

2. 1 教育（地方創生を担う人材育成）について

総論

奈良女子大学では、「奈良を知る・奈良で就職」をテーマに盛り込んだ「『奈良』女子大学入門」ならびに「なら学」を地方創生理解科目、「なら学+（プラス）」をPBL型科目とする初年次における地域志向教育を確立し、その上にPBL型科目による実践教育を通じて専門性を身に付ける教育プログラムを体系化するとともに、「地域志向科目」の全学必修化を実現した。「『奈良』女子大学入門」（平成30年度より開講）、「なら学+（プラス）」（平成29年度より開講）ではCOC+事業協働機関から、奈良の伝統産業、基幹産業、現代産業に携わる様々な専門家・実務家を招聘した講義を展開した。同時に整備が完了したサテライト施設を活用したPBL型科目を開講し、地域の課題発見と課題解決に向けた実践教育を展開した。さらに、起業マインドの醸成を図り、地域での新たな雇用創出に役立てるためアントレプレナー科目としてキャリア教育科目において、キャリアデザイン・ゼミナールC(5)「『ビジネスプラン』の作り方～アイデアだけでは終わらせない～」を今年度開講した。

1 地域志向科目の開講状況

(1) 地域志向科目の受講推移(科目数と受講者数)

平成28年度は29科目を開講し925人が受講、平成29年度は29科目を開講し961人が受講、平成30年度は32科目を開講し1,810人が受講、令和元年度は19科目を開講し1,424人が受講した（重複受講者を含む）。

全学部生に対する地域志向科目の受講者（入学後に1科目でも受講したことのある実人数）は、平成28年度2,069人に対して605人（受講率29.2%）、平成29年度2,063人に対して970人（受講率47.0%）、平成30年度2,085人に対して1,505人（受講率72.2%）、令和元年度は2,088人に対して1,881人（受講率90.1%）と順調に増加している。なお、地域志向科目の必修化により令和4年度には受講率100%に達する見込みである。

○地域志向科目の推移状況（科目数、受講者数）

		平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
開講科目数		29科目	29科目	32科目	19科目
内訳	地域創生科目	15科目	13科目	11科目	7科目
	PBL科目	14科目	16科目	21科目	12科目
受講者数		925人	961人	1,810人	1,424人
備考		キャリアデザイン・ゼミナール（日本一の奈良を知る）（新設）	「なら学+（プラス）」（新設）	「奈良」女子大学入門（新設）	地域志向科目の必修化・体系化の完了

○地域志向科目の受講者と受講率の推移

受講者数と受講率 (重複受講者を除く)		平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
H28 年生	入学者数 506 人	236 人 (47%)	298 人 (59%)	391 人 (77%)	398 人 (79%)
H29 年生	入学者数 515 人		277 人 (54%)	445 人 (86%)	470 人 (91%)
H30 年生	入学者数 520 人			435 人 (84%)	496 人 (95%)
R1 年生	入学者数 526 人				510 人 (97%)

(2) 令和元年度の開講科目と受講者数 (令和元年度)

奈良女子大学における地域志向科目は、文学部、理学部、生活環境学部の各学部規程に明確に位置づけ、令和元年度以降の入学生が、卒業するまでに指定された科目のいずれか1科目以上の受講を必修化している。

卒業要件として指定された今年度の地域志向科目は以下の19科目である。

科目群	区分 (※1)	開講期 (※2)	授業科目名	担当教員	受講者数 (人)
教養教育科目	地創	前期	奈良女子大学入門	小川・成瀬	604
	PBL	前期	パサージュ (32A)	宮路	17
	PBL	前期	パサージュ (32B)	宮路	12
	PBL	前期	パサージュ (39A)	西村・浅田	12
	地創	前期	なら学	寺岡 他	133
	PBL	後期	なら学+ (プラス)	成瀬・前川	217
	地創	後期	環太平洋くろしお文化論	西谷地 他	114
文学部 専門教育科目	地創	後期	なら学概論 B	寺岡	37
	地創	前期	文化人類学特殊研究	武藤	85
	PBL	前期	なら学フィールドワーク実習	寺岡	4
	PBL	不定期	コミュニティ・リサーチ	水垣・寺岡・佐藤	15
	PBL	不定期	コミュニティ・アクション	水垣・寺岡・佐藤	13
	地創	後期	なら学演習	武藤・寺岡	17
	地創	後期	地域探求実践演習	高田・吉田	5

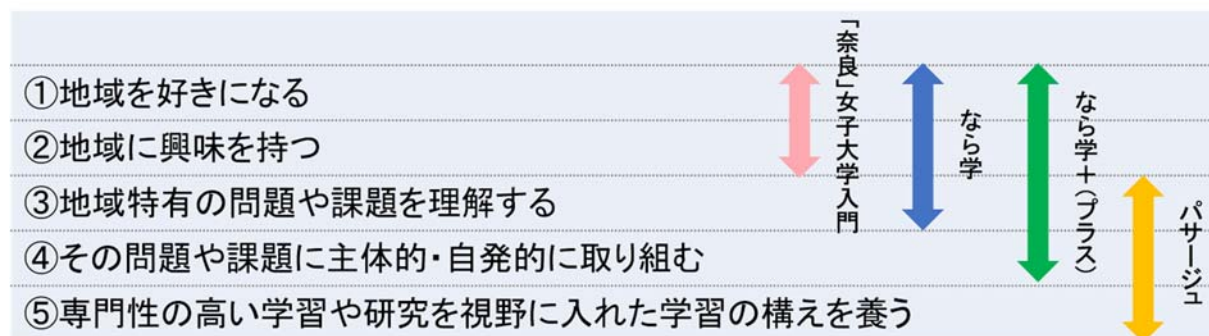
理学部 専門教育科目	PBL	不定期	サイエンス・オープンラボ I (A～E)	小林 他	56
	PBL	不定期	サイエンス・オープンラボ II (A～E)	小林 他	18
	PBL	前期	森林生物学野外実習	井田 他	12
	PBL	前期	河川生物学野外実習	酒井 他	12
生活環境学部 専門教育科目	PBL	後期	地域居住学	中山	41
合計					1,424

※1：地創 地域創生科目

PBL (Problem /Project-Based Learning：課題解決型学習)

※2：不定期 開講時期が定まっていない科目

○教養教育科目における科目配置と学びの変化



2 授業報告

A. 教養教育科目

(1) 「奈良」女子大学入門

教養教育科目『奈良』女子大学入門は、特に新入生向けの地域志向科目で、奈良女子大学で学び、安全で充実したキャンパスライフを送るために必要不可欠な内容をオムニバス形式で講義する授業で、Ⅰ. キャンパスライフの充実、Ⅱ. 奈良で暮らす、Ⅲ. 奈良女子大学で学ぶ、Ⅳ. 奈良を知る・奈良で就職の4つテーマで構成されている。

学長、学部長からのメッセージのほか、本学の歴史や男女共同参画社会推進のための取り組み、奈良県の経済や県内企業との共同研究を紹介し、キャリアデザインを奈良からスタートする授業で1回生を中心に604人が受講した。

特に、教育テーマⅣ「奈良を知る・奈良で就職」においては、下記の内容で、地元定着を志向した講義を展開、受講学生の奈良県や地域への興味関心の醸成に役立てた。

教育テーマⅣ	内容	担当者
「奈良を知る・ 奈良で就職」	COC+事業について	やまと共創郷育センター
	奈良県の経済	(一財)南都経済研究所
	奈良県の政策や動向	奈良県雇用政策課・奈良の魅力向上課
	奈良県企業との共同研究	理事(研究・情報担当)、本学教員
	奈良で就職①	内閣府参事官・ 学生生活課 就職係キャリアカウンセラー
	奈良で就職②	奈良経済同友会会員企業2社



授業の様子

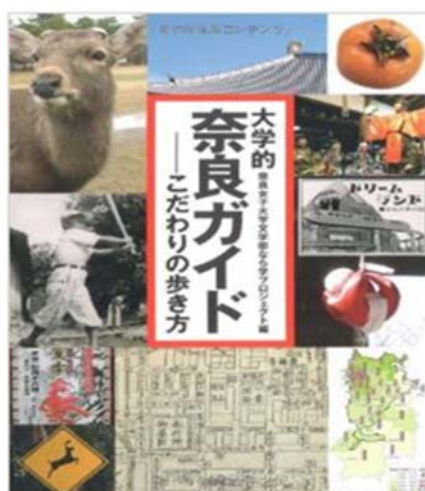
(2) なら学

教養教育科目「なら学」は、「奈良」をキーワードにして、奈良女子大学の多様な学びに触れ・知る「入門」となる授業である。奈良女子大学教授陣によってリレー講義形式で行われ、今年度は133人が受講した。

奈良について多面的な知的関心や学問的に考える能力を養うことを目的としている。

令和元年度 なら学授業スケジュール

回	授業内容	講師
1	イントロダクション・奈良県の概要	寺岡伸悟
2	奈良の祭	武藤康弘
3	奈良の産業・企業	やまと共創郷育センター
4	万葉論	西村さとみ
5	世界遺産建築の見方	上野邦一
6	奈良県の自然地理	浅田晴久
7	奈良公園	佐藤宏明
8	東大寺論	西谷地晴美
9	奈良の文化イベント：燈花会と映画祭	ゲスト（中野聖子）
10	都城論	舘野和己
11	奈良のアートまちづくり	山崎明子
12	吉野社会論	水垣源太郎
13	近代奈良の娯楽・郊外文化	内田忠賢
14	地図と奈良	西村雄一郎
15	テスト	寺岡伸悟



「大学的奈良ガイド」（なら学プロジェクト編、2009年）

(3) なら学+ (プラス)

教養教育科目「なら学+ (プラス)」は、事業協働機関 (COC+参加校、県・市町村ならびに県内民間企業) から、実務に携わる外部専門家、実務家を迎え、多彩なゲスト講師によるリレー講義で構成した。奈良の伝統産業、奈良の基幹産業 (林業・農業・観光・繊維・製薬) などの魅力や課題に身近に触れながら、課題発見、問題解決、提案力を養い、「生きた知」を身に付けた未来の地域リーダーを育成する科目として展開してきたが、平成 30 年度から 1 コマの授業の中で行政、民間双方からゲスト講師を招き、地域への理解を深め、地域の課題等について多面的・多角面でのモノの見方をできるように授業内容を見直した。

様々な視点から奈良の課題や取り組みについて学ぶことによって、奈良はもちろんのこと、地元に戻っても活躍できる未来の地域リーダーの育成を目指している。今年度は全学部から 217 人の学生が受講した。講義スケジュールは下記の通りで、授業冒頭には、前回授業の受講生感想と講師からのコメントをもとに振り返りを行い、奈良の課題を様々な他者から学ぶ授業構成として展開し、最終課題レポート「奈良への提案」を課した。

令和元年度 なら学+ (プラス) 授業スケジュール

回	授業内容	ゲスト講師
1	ガイダンス	担当教員・やまと共創郷育センター
2	“なら”でのコンテンツツーリズム ～観光のニーズとその課題～	奈良県立大学 (一社)吉野ビジターズビューロー
3	観光産業への理解を深め、課題を探る	(公社)奈良市観光協会 (一社)飛鳥観光協会
4	女性の多様な生き方・働き方を考える	奈良県福祉医療部こども・女性局女性活躍推進課 チアフル(株)
5	伝統・地場産業 (製薬) への理解を深め、課題を探る	奈良県薬事研究センター 佐藤薬品工業(株)
6	奈良の食育・栄養を考える	(株)池利・名阪食品(株)
7	奈良の特産品 (柿) を通じたマーケティングを考える	奈良県農林部マーケティング課 (株)マックス
8	伝統産業 (林業) への理解を深め、課題を探る	奈良県森林技術センター (株)イムラ
9	地場産業への理解を深め、課題を探る	河村繊維(株)・国広産業(株)
10	奈良の現代産業に聞く	(株)ATOUN・DMG 森精機(株)
11	地方自治体の役割・課題を探る	奈良県地域振興部・下市町総務課
12	生活福祉を考える	奈良佐保短期大学生生活未来科 奈良県社会福祉協議会
13	これからの地域社会と科学・技術の関係を考える	奈良工業高等専門学校
14	「課題発見・問題解決・提案力を養う」その 1 昨年度提案プラン紹介とプランニング講演	担当教員・(一財)南都経済研究所

15

「課題発見・問題解決・提案力を養う」その2
学生による地域活動事例発表と「奈良への提
案」の発展応用ならびに振り返りレポート

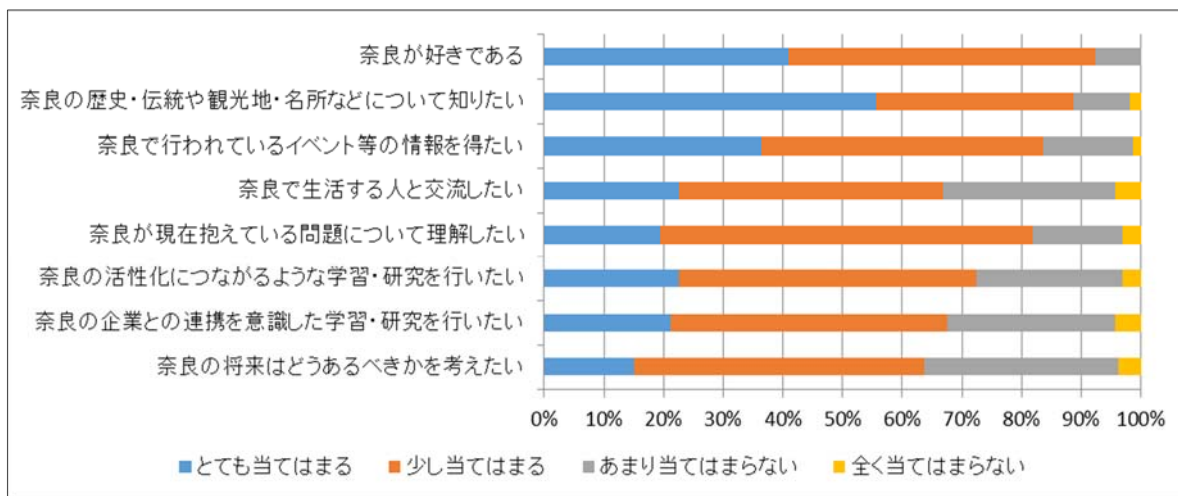
担当教員・やまと共創郷育センター



授業の様子

1) 受講動機 (有効回答数は 160 人)

ガイダンス時に、奈良への興味・関心などを尋ねた。多くの学生が「奈良が好きである」、「奈良について知りたい」、「奈良が抱えている問題について理解したい」と回答した。



2) 最終課題レポート 「奈良への提案」

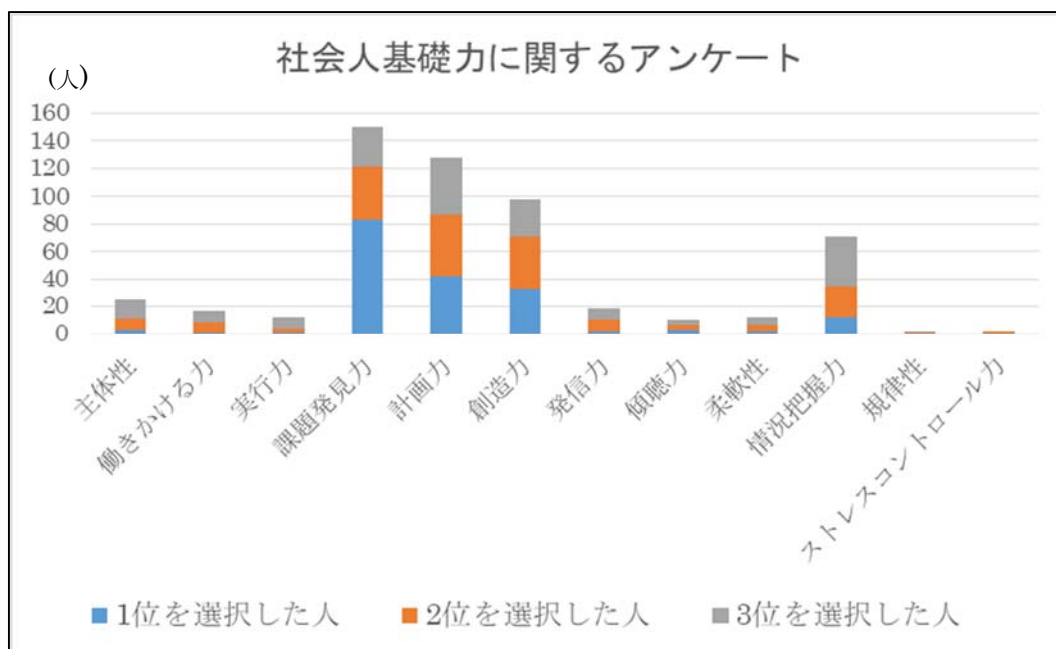
学生からの提案のうち、一次審査を通過した下記の 22 プランについて、令和 2 年 1 月 20 日 (月) に大学内で開催された奈良経済同友会との交流・懇談会にてプランの一部を紹介し、県内企業関係者からコメントを得た。また提案については、今後奈良県ならびに一般財団法人南都経済研究所による審査を行い、奈良の歴史伝統観光産業といった礎をさらに発展させる『なら』いにしえ賞」と、新たな奈良の未来を創生する『なら』みらい賞」を選出し、表彰する予定である。

ジャンル	奈良への提案プラン名
観光	奈良の滞在時間延長を目指した宿泊客増加プラン
観光	何度も来たいと思える奈良にするには
観光	ものづくり体験を通して奈良の魅力を全国に発信しよう！
観光	昼の街、奈良！～奈良公園セントラルパーク化計画～
観光	「奈良」に「シカ」ない夜を！～宿泊率アップ大作戦～
観光	「武」で輝く奈良
観光	なむあみだ仏っ！お参り奈良ツアー
観光	修学旅行の続きを、奈良で。
観光	バラエティーのある宿泊施設へ
観光	移動中に学ぶ、シカへの餌やり
観光	Let's play LARP (Live Action Role-Playing Game) in Nara !!
観光	デートにピッタリドキドキなら旅
社会生活	奈良県の企業を身近に感じよう
社会生活	都会っ子の感性や自立精神を豊かに！山村留学してみよう！！
社会生活	若者振興プログラム ～若者が住みやすい奈良市にするために～

社会生活	奈良をごみ0の町にする、ごみ回収プロジェクト
社会生活	未来の奈良で暮らし、奈良で生きるためのテレワーク
女性活躍	働きたいけど働けない・・・とは言わせない！ママの就業応援システム
特産(繊維)	あおぞら靴下屋さん
特産(菓)	奈良にしかない薬局、心鹿（ここしか）堂
農林業	大和野菜を全国へ！野菜お届けネット宅配便
その他	奈良へのふるさと納税で思い出作り！体験型プラン

3) 社会人基礎力に関するアンケートの実施 (有効回答数は182人)

「奈良への提案」課題によって、12の要素から構成される社会人基礎力のどの能力を身に付けることに役立ったかについて、役立ったと思う順に1位から3位まで回答させた。社会人基礎力の12の能力要素のうち、考え抜く力（課題発見力、計画力、創造力）を養うのに役立ったとする回答が上位3位を占めた。



学生は、なら学+（プラス）の授業内容ならびに最終課題レポート「奈良への提案」を通じて社会人基礎力の構成要素である「疑問を持ち、考え抜く力」（課題発見力・計画力・創造力）を身に付けたと自己評価している。特に「課題発見力」を養うのに役立ったと回答した学生は182人中150人であり、全体の82.4%を占めた。

(4) パサージュ

1) パサージュ 32AB「遺跡から奈良を学ぶ」 (担当：宮路 淳子)

a) 授業実施日ならびに概要

【32A】

4月19日	事前レクチャー、グループ分け
4月26日	フィールドワーク (テーマ：万葉) 万葉歌碑 佐保川沿い～狭岡神社
5月10日	フィールドワーク (テーマ：中世) 多聞城・転害門・正倉院
5月17日	フィールドワーク (テーマ：近世・近代) 奈良奉行所・北山十八間戸・旧奈良監獄所・雲居坂・轟橋・知事公舎
5月24日	グループワーク 1 ・グループディスカッション+資料の作成 (ラーニングコモンズ) ・フィールドワーク
5月31日	グループワーク 2 ・グループディスカッション+資料の作成 (ラーニングコモンズ)
6月7日	グループごとに発表 (15分×4) と講評 (5分×4) (S123)

【32B】

6月14日	事前レクチャー、グループ分け
6月21日	フィールドワーク (テーマ：万葉) 万葉歌碑 佐保川沿い～狭岡神社
6月28日	フィールドワーク (テーマ：中世) 多聞城・転害門・正倉院
7月5日	フィールドワーク (テーマ：近世・近代) 奈良奉行所・北山十八間戸・旧奈良監獄所・雲居坂・轟橋・知事公舎
7月12日	グループワーク 1 ・グループディスカッション+資料の作成 (ラーニングコモンズ) ・フィールドワーク
7月19日	グループワーク 2 ・グループディスカッション+資料の作成 (ラーニングコモンズ)
7月26日	グループごとに発表 (15～20分×3) と講評 (5分×3) (S123)

b) 授業成果 (担当教員からのコメント)

1 回生前期でまだ奈良自体が初めてと言う学生も多く、フィールドワークをしながら大学周辺や奈良への理解を深めてくれたと感じた。いずれも人数が 10 人をこえていたため、フィールドワークで十分な情報伝達ができなかったかもしれず、上回生のサポートがあったらうれしいと思った。

2) 「パサージュ (39A)」 (担当: 西村 雄一郎・浅田 晴久)

a) 授業実施日

第1回	合同オリエンテーション
第2回 (4月16日)	自己紹介、授業の目的の説明、今後の予定の確認
第3回 (5月7日)	十津川村について調べてきた項目の発表、現地訪問に関する諸注意
第4回～第5回 (5月18日)	十津川村現地訪問 1日目
第6回～第7回 (5月19日)	十津川村現地訪問 2日目
第8回 (6月4日)	現地訪問のまとめ

b) 授業の概略

本授業における学びの特徴は、「実際に、現地に足を運んで、自分の目で見て確かめる」ことである。今回の現地訪問先として、これまで授業や教員の調査でゆかりのある奈良県吉野郡十津川村を選定し、1泊2日で行った。1回生12人(文学部2人、理学部3人、生活環境学部7人)とTA学生1人、教員2人で行った。

現地訪問1日目は、8時30分に大学を出発し、レンタカー2台で十津川村に向かった。谷瀬の吊り橋の見学、道の駅十津川郷で昼食をとった後、十津川村歴史民俗資料館において館長代理の方より村の概要と歴史について説明を受けた。その後、田戸地区に移動し、瀬ホテルにて経営者よりUターンしてきた住民の現状について、また、瀬峡の川船観光経営者より、観光客の動向について説明を受けた。

現地訪問2日目は、武蔵地区の教育資料館を見学した後、地域おこし協力隊の女性、教育委員会に勤務している学芸員の女性に、それぞれ村の生活について話をうかがった。雨天のため役場会議室を借りて昼食をとった後、世界遺産小辺路沿いにある果無集落、平谷地区地域交流センターいこら、木工品の製造・展示・販売施設 KIRIDAS など見学し、18時30分に大学に到着・解散した。

c) 受講学生の感想 (学生レポートより抜粋)

- ・十津川村のような田舎に滞在するという事は、私にとってほぼ初めての経験であった。さまざまところに滞在した二日間を通して、大自然に囲まれている十津川村だからこそ感じる魅力がある一方で、住民や村の関係者の方のお話を、実際に聞いてみてわかる十津川村の現状があるということも実感した。十津川村に限らず、全国にはこういった地域が多く存在し、これからますます増えていくと考えられる。そこで、私たちに何ができるのか、どうしたら皆にとってより良い暮らし、居心地の良いところができるのかを考えるきっかけにもなったので、もっとさまざまな視点から、ものを捉えられるよう、学びを深めていきたい。
- ・十津川村の林業を通して地域で衰退していく産業の実態や林業という産業が抱える問題に触れることができた。また、村人の村に対する考え方の多様性にふれて、自分が住む土地に対する愛着やその土地に住んでいる/生まれたという個性にたいする認識がそれぞれの立場によって違うことがわかった。今回話を聞いたのは村人の中でも外向

型の方に偏っていたので、そのほかの方の考えも知りたいと思った。

- ・十津川村に行くまではわからなかったけれど、結構人工林が多くて、国道などの真新しい道路が作られていて、観光客用に新しく設置されたであろうトイレがあり、十津川ビデオというものが存在して…たくさんの発見があり、自分の住んでいるところとの差にとっても驚かされた。私は今まで、吊り橋やダム、林業、災害、村、それらのつながりなんて考えたこともなかったけれど、このパサージュを通して、こんなにもつながりがあるのだということを実感することができた。

d) 授業成果 (担当教員からのコメント)

担当者の専門分野 (地理学、地域研究) では、とにかく現場を訪問して自分の目で観察するということが、研究の基本になる。文献講読や統計資料分析などの研究手法だけでなく、フィールドワークも重要な手法となりうることを、1回生の段階から理解してもらえよう、時間をかけて授業内容を準備した。授業に参加するまで、受講生はほとんど山間地域に関する知識・経験をもっていなかったが、今回は、比較的年齢の近い女性 (地域おこし協力隊の20代女性)、立場に近い住民 (都市部の大学を卒業してUターンした起業家) に協力してもらえることができたので、初めて訪問する過疎地域についての話でも、よく理解することができたと思われる。また、現地訪問経験のある4回生にTAとして同行してもらい、受講生の取りまとめ役を務めてもらったことも、授業を円滑に進めることにつながった。



瀬ホテルの前で写真を撮る受講生



地域おこし協力隊から話を伺う

B. 専門教育科目

(1) 「なら学フィールドワーク実習」 (担当：寺岡 伸悟)

a) 授業の実施日

令和元年度前期開講

b) 授業の概要

「なら学フィールドワーク実習」は、文学部専門教育科目に位置付けられる科目である。2019年度の「なら学フィールドワーク実習」は、奈良の自治体など公的な組織・団体を取材することがテーマとなった。企業とはまた異なり、公的な性格をもつ公共団体は、奈良やそれが事業対象とする奈良県内の地域をどのように捉えているのか。またそこで働くことの魅力は。こうしたことを考えるために授業は始まった。

まず、授業のガイダンスをかねて、奈良市役所に勤務する本学 OG にお話し、大学のある奈良市に就職した経緯、ふだんの仕事、課題、魅力などについて話をしてもらった。

その後、受講生の興味に応じて、訪問調査対象先が、奈良県警察、奈良市観光協会、中和の自治体（大和高田市役所、葛城市役所）、南部の自治体（吉野町、奈良県地域振興部南部東部振興課）と決定した。それぞれを別の受講生が担当し、実際に対象先を訪問して、仕事・課題・魅力、そして奈良で公的な仕事に就くこと、をインタビューや資料調査した。一部の学生は、帰省ついでに東京の奈良まほろば館にも調査に赴いてくれた。

受講生の高い問題意識のおかげで、普段ではなかなか調査対象に選定されにくい、警察署、中和の自治体の観光振興、移住に取り組む南部自治体といった組織を学生が積極的に選んだことは、COC+事業が学内で深まってきたことを印象づけることがらであったと思われる。

成果は小冊子『奈良と人と私—まちづくりの一員として奈良を見る—』としてまとめ発刊した。また受講生のなかから県内就職者がでたこともあわせて記しておきたい。

以下にその冊子の「編集後記」から学生の感想を抜き出しておきたい。

c) 受講生の感想

Aさん

今回県、市、住民という3つの代表の方から、奈良の観光という同じテーマについてご意見をうかがうことができました。部外者であった私にとっては非常に興味深かったり、意外だったりする点が数多く存在しました。奈良に住んで、これからの観光を考えていきたいと思っている私にはかけがえのない経験でした。今回調査した内容を踏まえて、今後の課題などを自分なりに考えていこうと思っています。最後に、今回ご意見を聞かせてくださった皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

Bさん

最初に「行政に取材に行く」と授業で説明を受けたときは、難しそうだと身構えていました。しかし実際の役所の方々は非常に親切で、拙い質問に対して真摯に、丁寧に答えてくださいました。「観光」と一口に言ってもそのアプローチ方法は様々で、芸術で魅

せたり、特産品で魅せたり、暮らし方で魅せたり。そして発信方法も、内容によって工夫されていることを知り、奈良だけではなく、他の地域の観光事業にも興味を持ちました。今回は執筆期間に偶然東京に行く機会があり、奈良まほろば館の方にお話を伺うことができ、他の取材内容とはひと味違った、この冊子の中でもいいスパイスになっているのではないかな、と思っています。今回取材にご協力くださった皆さまに、心より感謝いたします。

Cさん

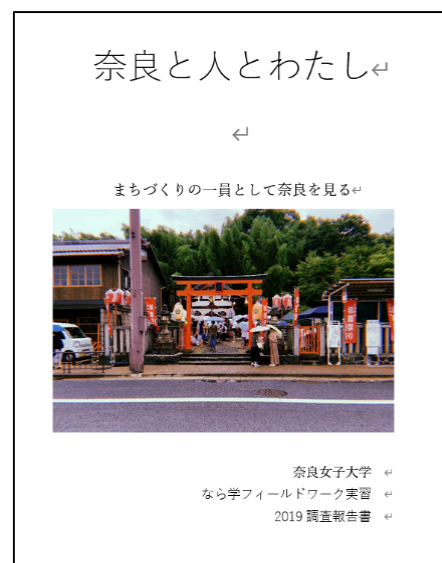
今回の調査を通して、奥大和地域の過疎の現状とその現状を改善する取り組みについて知ることが出来ました。より多くの人に奥大和を知ってもらうために様々な企画を考え、イベントを開催している方々の発想力と行動力は奥大和に対する熱意に溢れており、どのようなことをされているのか知れば知るほど、「私だったらそのような発想は思い浮かべることができない、本当に凄いなあ」という思いが強くなりました。私は奥大和地域の出身でも奈良県の出身でもありませんが、実際に県内各地に赴いてみて、奥大和ひいては奈良県全体がとても素敵なお場所だと確信を持って言えるので、この冊子を読んで下さった方にも奈良県内の色々な場所に行ってみてほしいと思っています。最後になりましたが、私の調査に協力して下さった方々に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

Dさん

取材の日取りを決めたり、電話をかけたり、自分で話を聞きに行くなど、初めてのことでばかりで緊張しましたがすべて貴重な体験になりました。警察は堅実で少々近寄りがたいイメージがあると最初考えていましたが、取材を重ねるたびに、だんだん当初の自分の考え自体が変わっていくのが面白いように感じました。警察の活動についてはテレビや本で知ることができるかもしれないけれど、やはり他の人の目を通して伝えられていることだと思います。警察に限らず、真の意味で知るというのは自身が実際に見て感じたことを、他の人が持つイメージや考えとすり合わせていくなかで感じる疑問や、合致点について考え、もう一度話を聞いたり調べたりしていくことが近道なのかもしれない、とこの取材を通して感じました。

d) 授業の成果（担当教員からのコメント）

小冊子『奈良と人と私—まちづくりの一員として奈良を見る—』を発刊した。



(2) 「コミュニティ・リサーチ」：地域コミュニティの課題把握法

(担当：水垣 源太郎・佐藤 克成・寺岡 伸悟)

a) 授業実施日

第1回 (4月20日)	アイスブレイキング、講義(有江正太氏・空き家コンシェルジュ代表)、調査方法論と学外実習準備
第2回 (5月25日～26日)	学外実習Ⅰ(奈良県下市町) 第一日：現地調査(広橋区清水)、 第二日：農山村生活体験(摘蕾体験)、下市町巡検
第3回	グループ別活動(日程はグループごとに調整)
第4回 (7月6日～7日)	学外実習Ⅱ(奈良県下市町) 第一日：農山村生活体験(家庭料理調理体験・柿の葉寿司)、現地調査打合せ(広橋区女性) 第二日：下市町巡検

b) 授業の概要

本授業は、後期授業(コミュニティ・アクション)とともに、地域コミュニティの現状を理解するためのコミュニティ社会学の理論と方法を実践的に学び、それを通して、課題の解決の糸口となるアクション(PRコンテンツ制作や特産品開発、成果イベントなど)の企画・実践の過程を体験的に学ぶことを目的としている。

本授業ではまず、奈良県を中心に空き家問題の解決のために全国的に活動されているNPO・空き家コンシェルジュ代表の有江正太氏に空き家問題の現状と課題に関する講演をいただいた。学生はこれに基づいて、下市町広橋区清水集落での調査計画を立案し、学外実習Ⅰにおいて現地住民4人の方にお集まりいただき、インタビュー調査を実施した。その結果、現住高齢者の生きがい創出の一環として、遠隔コミュニケーション・システム(スカイプ)を活用した本学留学生への伝統文化・日本語指導の可能性が示唆された。そこで学外実習Ⅱでは、後期授業(コミュニティ・アクション)での「スカイプ実験」計画を立案した。さらに、地域の若手女性グループと話し合いを行い、10月27日に行われる音楽イベント「manabiya 音楽会 2019・児玉奈央ヒカリノハココンサート」への演出協力およびワークショップ開催の打合せを行った。さらに丹生川上神社など地域文化資源の巡検を行った。

担当教員は水垣源太郎(文学部)、佐藤克成(生活環境学部)、寺岡伸悟(文学部)の3人であり、受講生は16人(文学部15人、生活環境学部1人)であった。また秋谷奈美氏には2回の現地実習全体にわたってサポートをいただいた。また現地調査にあたり、東昌博氏(広橋区清水)にご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

c) 学生の感想と写真

学生からのレポートによれば、本授業が「おもしろかった」、本授業を通して「新しい知識やものの見方がとても得られた」と回答し、受講生の大半が後期授業の受講することにつながった。とくに昨年度からの継続受講生が多く、空き家問題という課題をもって地域住民に調査活動を行ったこと、地域特産物である柿の摘蕾や地域の伝統料理の調理に参加したことが貴重な体験となり、楽しく地域を学ぶことにつながっている。

d) 授業成果（担当教員からのコメント）

今期受講生は、東北地方から中国地方まで、大都市圏から中山間地域まで多様な背景を持つ学生が参加しており、もともと地域コミュニティの問題への関心が高かった。奈良県南部中山間地域の課題を現地住民の方々から直接うかがうという経験、地域の持つ文化資源を体験的に見直すという経験によって、学生は奈良を理解するのみならず、地域コミュニティの課題解決のための実践的方法論を習得することができた。とくに、今回は前期のリサーチを後期のアクションへ展開するという理想的な授業ができた。さらにはそれをご協力いただいた地域に還元するとともに、次年度以降のさらなる展開へつなげることができたという意味で学生と地域の双方に役立つ授業となったと評価できる。また、今期受講生 1 人が下市町役場に職員として採用されることになり、地域コミュニティへの継続的な貢献を目指す学生を輩出したことは大きな成果と考えられる。



アイスブレイキング（グループ）



アイスブレイキング（全体）



講演（空き家コンサルジュ）



インタビュー準備



インタビュー



インタビュー参加者集合写真



柿の摘雷体験



地域散策



地域産業見学（前忠）



柿の葉寿司体験



地域文化資源見学



音楽会打ち合わせ

(3) 「コミュニティ・アクション」：地域コミュニティの課題解決に向けた活動実践

(担当：水垣 源太郎・佐藤 克成・寺岡 伸悟)

a) 授業実施日

第1回（8月1日）	
第2回（9月17日）	
第3回（10月3日）	講義、グループ分け、アイスブレイキング・担当・佐藤ドローン、全方位カメラ、タッチパネルを午前中1か所、午後1か所で試す。
第4回（10月26日～27日）	学外実習Ⅰ（奈良県下市町） 第一日：準備作業 第二日：音楽イベント「manabiya 音楽会 2019・児玉奈央ヒカリノハココンサート」への演出協力およびワークショップ開催
第5回（12月7日～8日）	学外実習Ⅱ（奈良県下市町） 第一日：下市公開ワークショップ「遠くをつなぐ・異文化をつなぐ」（於：広橋会館）でのスカイプ実験 第二日：振り返り作業

b) 授業の概要

本授業は、前期授業（コミュニティ・リサーチ）に引き続き、地域コミュニティの現状を理解するためのコミュニティ社会学の理論と方法を実践的に学び、それを通して、課題の解決の糸口となるアクション（PRコンテンツ制作や特産品開発、成果イベントなど）の企画・実践の過程を体験的に学ぶことを目的としている。

前期授業（コミュニティ・リサーチ）の成果を踏まえ、①地域の若手女性グループによる音楽イベント「manabiya 音楽会 2019・児玉奈央ヒカリノハココンサート」への演出

協力およびワークショップ、②遠隔コミュニケーション技術（スカイプ）による地域住民と本学留学生とのコミュニケーション実験（スカイプ実験）の2つを実施した。

まず、①音楽イベントへの演出協力として、佐藤講師の主指導の下に「ヒカリノカーテン」ワークショップを企画した。イベントの来場者にステンドグラス風の紙製スライドを制作してもらい、それを開演前のプレイベントとして会場の平面スクリーンに投影し、イベントのテーマである光のイメージを演出するというものである。受講生は、数回にわたって本企画の立案、試行および事前準備を行った。学外実習Ⅰ・第2日のイベント当日、受講生は、本企画以外にもアヒージョ等各種ワークショップのサポートなどイベント全体の実施に協力した。②遠隔コミュニケーション技術（スカイプ）による地域住民と本学留学生とのコミュニケーション実験（スカイプ実験）は、学外実習Ⅱ・下市公開ワークショップ「遠くをつなぐ・異文化をつなぐ」（於：広橋会館）（12月7日）のなかで実施した。これは、遠隔コミュニケーション技術（スカイプ）を通じて下市町と奈良女子大学を結び、中山間地域の伝統文化に関わる語彙や文化について、地域住民の方々から留学生が学ぶ実験（スカイプ実験）である。まず前半は、「ムラ資源点検インタビュー」調査を行い、地域の高齢女性から広橋の伝統文化を聞き取りつつ、留学生に伝えるとよいと思う文化行事や料理を検討した。次に、下市町広橋と奈良女子大学をスカイプでつなぎ、Ⅰで選んだトピックを留学生に話していただいた。学生はその補助を行い、コミュニケーションに伴う問題を聞き取り、課題を考えた。最後に、振り返りとして、来年度の活動についても話し合った。その結果、来年度前期により多くの方々にご参加いただいて実施することとなった。最終成果物として、ムラ資源点検記録と今回の実験を改善した次回実験計画案を提出させた。

担当教員は水垣源太郎（文学部）、佐藤克成（生活環境学部）、寺岡伸悟（文学部）の3人であり、受講生は13人（文学部13人）であった。また秋谷奈美氏には2回の現地実習全体にわたってサポートをいただいた。またスカイプ実験にあたり、東昌博氏（広橋区清水）にご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

c) 学生の感想

今期は、学生が夏休み期間中から積極的に準備作業に携わり、音楽イベントとのコラボスカイプ実験などのアクションにも積極的に参加していた。こうした経験が楽しく地域を学ぶことにつながっている。

d) 授業成果（担当教員からのコメント）

今期受講生は大半が前期からの継続受講生であり、とくに昨年度からの受講生も多かった。そのため、学生は本授業のねらいを十分理解しており、そのことがとても効率的な学びにつながった。また音楽イベントへの参加は初めての試みであったが、学生は主催の地域女性グループの意図を十分理解しつつ、地域住民との交流を十分に生かしたワークショップを企画実施できた。また公開ワークショップのスカイプ実験では前期授業の成果をふまえた企画実施と振り返りができた。全体として、地域住民との協力・交流の中で学びを進めていく態度が養われたものと考えられる。

次年度も地域住民との協力を通じて本授業を継続的に実施する見込みが立っており、今後も更に展開を試みたい。



ワークショップ準備



ワークショップ



ワークショップ展示



音楽会手伝い（清掃）



音楽会手伝い（餅）



音楽会手伝い（アヒーヨ）



音楽会手伝い（こんにゃく）



公開ワークショップ



スカイプ実験



公開ワークショップ振り返り

(4)「地域居住学」 (担当：中山 徹)

a) 目的

地域居住学では町の中心部と山間部をフィールドとしている。今年度は奈良市中心市街地にあるもちいどの商店街を訪問し、商店街の状況、商店街活性化の取り組みを商店街の方から伺った。また、山村として東吉野村、宇陀市を訪問し、地方創生の取り組みについて説明を受け、現地で仕事をされている方の話を伺い、さらに公共施設のリノベーションを見学した。両方とも現地で学んだことを踏まえたワークショップを行い、学生の意見をまとめた。

b) 内容 (商店街)

以下のようなスケジュール、内容で実施した。

①12月24日(火) 講義 場所：大学

商業施設の立地計画、商店街の現状、商店街活性化の取り組みなどについて説明した。

②1月14日(火) 現地見学会 場所：もちいどの商店街

商店街の方をゲストスピーカーとして招き、商店街の歴史、商店街活性化の内容などを説明していただき、その後、商店街を案内していただいた。

③1月21日(火) ワークショップ、場所：大学

4班に分かれ、学生から見た商店街の魅力、商店街で改善した方がいい点、学生として商店街活性化に協力できることをテーマにワークショップを行った。商店街の方をゲストスピーカーとして招き、各班で取りまとめた内容に対してコメントをいただいた。

c) 内容 (山村)

以下のようなスケジュール、内容で実施した。

①1月7日(火) 講義 場所：大学

過疎・過密の現状、地方創生の目的と内容、奈良県吉野地域の概要、公共施設の利活用などについて説明した。

②1月20日(月) 現地見学会 場所：東吉野村、宇陀市

訪問したのは、東吉野村：オフィスキャンプ、旧庁舎、ふるさと村、宇陀市：アクティブセンター宇陀、ふるさと元気村。東吉野村職員、東吉野村に移住して働いておられる方の話を伺った。また旧学校をリノベーションして、宿泊施設、福祉施設、文化芸術施設として活用されている方の話を伺った。

③1月28日(火) ワークショップ 場所：大学

4班に分かれ、東吉野村で訪問した旧役場の利活用方策について検討した。

d) 授業成果 (担当教員からのコメント)

例年は10月～11月にかけて山間部のフィールドワーク、ワークショップを実施し、1月ごろに商店街で実施していた。しかし今年度は先方との関係で、両者とも12月から1月に実施することになり、ややスケジュールがかぶってしまった。先方の受け入れとの関係があるため大学側の事情だけで日程を決めることができないが、次年度はできる限り元のスタイルに戻したいと考えている。山間部のテーマは毎年変えているが、今年度は公共施設のリノベーションにした。テーマが具体的であり、学生も取り組みやすかったようである。



もちいどの商店街現地見学会



商店街ワークショップ



東吉野村現地見学会



東吉野村ワークショップ

C. キャリア教育科目

「キャリアデザイン・ゼミナール C(5)」

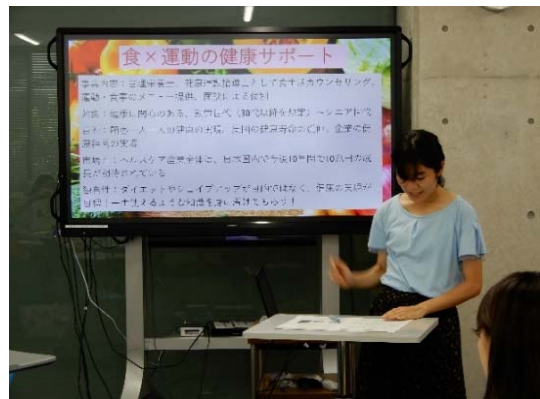
起業マインド醸成のため、平成 28 年度に「女性の起業(働き方)を考える」セミナーを実施した他、平成 29 年、30 年、令和元年度においては、「なら学+ (プラス)」授業の中で奈良県出身の女性起業家をゲスト講師として招き、当該講師が起業に至った過程や起業の魅力、課題解決などについて紹介してきた。起業マインド教育を深化させるため、今年度キャリア教育科目において、キャリアデザイン・ゼミナール C(5) 『『ビジネスプラン』の作り方～アイデアだけでは終わらせない～』を開講した。

回	授業内容
1	ビジネスプランの必要性について ビジネスプランを作成するための意義の理解を深める
2	ビジネスプランの書き方のノウハウについて ビジネスプラン作成にあたってのポイントを身に付ける
3～4	ビジネスプランを考える アイデアを実行可能な具体的なビジネスプランにしてみる 顧客視点、論理的な事業展開などを身に付ける
5～6	作成したビジネスプラン発表ならびに意見交換 競争優位性やマーケティング、将来ビジョンなどを意見交換・情報交換
7	ビジネスプランの改良 業績計画や資金計画など数値への信頼性を高める
8	外部評価と振り返り 外部講師からの評価を受けて、ビジネスプランコンテストへのチャレンジを促す

令和元年 7 月 20 日(土)、8 月 3 日(土)の 2 日間、南都経済研究所から吉村主任研究員・丸尾主席研究員(いずれも中小企業診断士)を講師として開講した。「ビジネスプラン」は事業を展開する際の指針となる計画案であり、内部関係者で確認、共有するのみならず、金融機関や投資家等の外部関係者に計画の意図を伝えて、協力・支持を得るために必要不可欠なものである。本科目では、「ビジネスプラン」の構成要素を理解し、学生自身の「アイデア」を素材に、グループワークを通じて学生相互の観点を交差させ、専門家のアドバイスを得ながら、プラン作成のプロセスを具体的に学ぶことを目指すとともに、「ビジネスプラン」の作成プロセスならびに各自が作成した「ビジネスプランの発表」を通じて、①自分の考えを他者に伝える能力、②課題を取り巻く外的および内的要因に関する情報収集および整理能力、③それらを現実的に検討する能力、および多角的、多面的な思考力、④積極的に行動を起こす態度等の向上を目的とした。

受講した 7 人の学生は、2 日間でビジネスプラン作成の基礎を学び、実際にプランを作成して発表する段階までを体験し、高齢者の余暇時間の有効活用、地域の特産物の有効活用、若者の政治離れ、食と健康、観光客のホスピタリティ向上、災害発生時の支援等、自分自身の経験も踏まえながら様々な観点から提案を行った。受講学生からは、ビジネスプラ

ンの作成・発表にあたり、具体的な計画への落とし込みや独自性、実現可能性、継続性のための資金計画が大変だったといった他、講師からの的確なアドバイスをいただき、ビジネスのノウハウが身に付いたといった感想があった。担当講師ならびにビジネスプランの発表を聞きに駆けつけていただいた南都銀行古川業務役からは、「学生ならではの視点や少し改良すれば実現可能性のあるものなど各自のアイデアをビジネスプランにうまく昇華させている」、「何より学生の地域社会への貢献などビジネスプランに対する熱意が良く伝わった」といった講評をいただいた。



授業の様子

また、受講者のうち2人が、授業にて作成したビジネスプランを第5回「かしはらビジネスプランコンテスト」に応募した。このビジネスプランコンテストは橿原商工会議所が「独自技術や地域資源を活用する!」、「地域課題を解消する!」アイデアを生かした新たなビジネスや独自性のあるビジネスプランを発掘・応援するもので今回が第5回目である。

令和元年10月17日(木) 橿原観光ホテルにて、9月30日の一次審査を通過した9人(うち学生3人)が最終審査に臨み、「新規性」、「市場性・将来性」、「実現可能性」、「地域経済・社会への貢献性」、「プレゼンテーション力」といった審査基準に基づいて専門家などによる最終審査が行われた。結果、本学生活環境学部4回生 須川真奈江さんが「審査員特別賞」を受賞した。

須川さんのビジネスプラン「趣味で収入を!今からでも簡単にできる手芸教室」は、趣味で行われている手芸教室で作成した作品をハンドメイドアプリを使って販売代行を行うもので、趣味の世界から社会との交流の場に、さらに、収入も得ることが出来るというコンテンツを組み合わせたプランで実現可能性も高いことや、地域への貢献度も高いと審査員から評価された。



第5回 かしはらビジネスプランコンテストの様子

D. サテライト設置地域で実施した科目

住環境学科専門科目関連 (担当: 室崎 千重)

■住環境学基礎実習における十津川村での活動報告

a) 授業実施日

2019年10月6日～7日	村の魅力発見調査・谷瀬地区稲刈 (谷瀬・瀬峡)
2019年11月6日	村の魅力と課題、学生の実践活動案について話し合い @奈良女子大学
2019年11月8日～9日	谷瀬集落の寄合参加、提案内容を集落と相談 散歩道の交換が必要な看板調査
2019年11月26日	谷瀬地区での集落活性化への学生の実践活動検討 @奈良女子大学
2020年1月16日～17日	谷瀬集落の寄合参加、提案デザインの試作品の紹介、 集落の方と意見交換、散歩道の手書き看板の更新
2020年2月28日/3月5日	美吉野醸造にて 純米酒「谷瀬」の仕込み体験
2020年3月25日	谷瀬集落の寄合参加、集落内店舗で使用するラッピング グッズを届ける
後期随時	谷瀬集落のお土産 PR のためのロゴ、ラベル、ハンコ と紙袋等のデザインと製作

b) 授業の概要

住環境学基礎実習では十津川村谷瀬集落に通い、村の方と一緒に今後の移住・定住を見据えた村づくり活動の実践に引き続き取り組んでいる。本授業は地域課題の理解と実践を通して村づくりの方法を学生が主体的に学ぶことを目的としている。初年度からの活動の継続に加えて、毎年を受講学生が地域での気づきをもとに新たな提案を考え、実践している。継続的な活動として、谷瀬集落内のゆっくり散歩道の看板整備と魅力アップ提案、古民家の休憩所“こやすば”の活用、純米酒「谷瀬」の米作りからお酒の仕込みまでの参加がある。今年度の新たな活動は、集落が運営する店舗の商品をお土産として配りたくなる紙袋等のラッピング提案と純米酒「谷瀬」販売時に、集落と大学が地域づくりとして取り組むというストーリーを魅力的に伝えるカードのデザインと製作である。現地調査と住民への聞き取りをもとに学生がデザイン検討し、地元の寄合での提案を経て、製作を進めている。

担当教員は室崎千重 (生活環境学部)、今期は生活環境学部3回生6人と室崎研究室の学生8人が取り組んだ。

c) 学生の感想

3回生 Sさん

今まで先輩たちが行ってきた活動に自分も参加することができて、活動を続けること、引き継ぐことの楽しさ、嬉しさを感じています。私たちの学年は6人いるので、それぞれのアイデアが集まって、より良いアイデアになっているのが分かりやすく、また、その

アイデアがイメージ化され、形になると、感動を覚えました。案を提出するだけでなく、実際にモノをつくり、納品して使っていただくと考えると、大変やりがいがあります。十津川村谷瀬集落は奈良市とは違って小さな行政ではありますが、その分、自分たち学生が行ったことも目に見えて反映されるので、とても良い経験になります。

3回生 Hさん

十津川村に対して、私たちが新たに取り組めることは何か、を考える中で、村の魅力を知ってもらうためにできることは自分が思っている以上にあるのだと気づかされました。プロジェクトをすすめていくためには、村のことだけではなく、村に来てくださる人のことも考えなければならないので、どんなモノやコトが求められているのかを導き出すのが大変でもあり、楽しくもありました。これらの経験はいずれも、一人では得られないものなので、このプロジェクトに携わることができ、良かったと思います。

3回生 Rさん

ゼミに入ってから十津川村には何回か行かせて頂いて、谷瀬集落の村おこしやゼミで先輩方々が取り組んできたことを見て、私もぜひそのような活動に参加してみたいと感じました。実際去年の10月頃から3回生がつくる新しいプロジェクトに参加し、集落の住民たちの声を聞き、学生のアイデアで依頼された酒の説明紙や茶屋で使えるかわいいお土産袋を作って寄り合いの時に見せていただきました。村の方々の喜ぶ姿を見てとても嬉しかったです。このような小さなことでも村に必要であり、村の環境をより良くすることができて、これからもこの活動が続いていけたら良いと思いました。

3回生 Iさん

はじめ、どのような活動をするか計画している間は、悩むこともありましたが、無事に形にすることができたので安心してしています。計画していく中で、色々な方から意見をいただき、納得のいくものを作成できたことがとてもよい経験になりました。実際に私たちの活動が、集落の人や観光で訪れた人に届くことがとても嬉しく、このプロジェクトに関わることができてよかったです。

3回生 Hさん

十津川村の集落のためにできることを考えてきましたが、私にとっては初めての経験だったので、刺激的でした。試行錯誤して作ったものに対して意見をもらって、より良い形になっていったことが嬉しかったです。この活動によって、この集落の人々と関わることができ、また貢献することができて、良い経験になりました。私達が作ったものが実際に十津川村に訪れた人々に届くことが楽しみです。

3回生 Oさん

奈良に住んでいても、十津川について知らないことばかりだったので、今回のプロジェクトを通して、十津川村のことについて知ることができて良かったです。十津川の魅力を、観光に来た方や、十津川のことを知らない方にも知ってもらえるように、たくさん話し合いを重ねて、自分達が作りたいものがだんだん形になっていくのが良かったです。これから私たちの作ったものを通して、十津川の魅力が広まって欲しいと思います。

d) 授業成果 (担当教員からのコメント)

数年間を通して、ひとつの集落に関わることで単年度では実現できない充実した活動となった。前年度の学生の活動をふまえながら、集落がより良くなる新たな提案を重ねることで骨太の質の高い活動となり、集落の人の思いも丁寧にひろいながら活動に繋げることができた。各年の学生も、自分たちの提案・実践が実際に地域で役立つことを体験したことで、学生でも地域に対してできることがあるという実感を得ている。地域と大学が協働する効果とそのひとつの手法を得ることができた。



谷瀬集落での酒米の収穫



谷瀬地区での調査後の話し合い



谷瀬集落の寄合での実践活動提案



谷瀬集落内のゆっくり散歩道の看板整備



学生が製作した十津川杉の商品

■福祉住環境学 十津川村の高齢者の暮らしを学ぶ

a) 授業実施日

2019年6月11日	学内にて十津川村概要説明
2019年6月22日～23日 (9人)	村の暮らし体験・高齢者の暮らしのお話 十津川村谷瀬集落の地域活動、 高森のいえ、復興モデル住宅の見学、レクチャー
2019年6月25	学内にてグループごとに現地での気づき、提案を発表

b) 授業の概要

福祉住環境学（住環境学科専門科目）の3回は、中山間地域の高齢者福祉について十津川村の活動より実践的に学ぶ。十津川村の高齢者から昔の暮らし等についてお話を聞き、生活への理解を深める。高齢者も最期まで暮らし続けられる村づくり実践としての「高森のいえ」等の見学を行う。学生は体験をもとに、地域での気づき、課題、提案を整理して発表する。担当教員は室崎千重（生活環境学部）、生活環境学部3回生9人が受講した。

c) 学生の感想

学生の感想レポートには、「高齢者の暮らしは、最初不便そうだなと思った。しかし、暮らしている方々は、そこまで苦勞しているようにも見えなかった。ミニマリズムではないけれど、自分の生活に必要なものをわかっていて、自分で生産もしたりして無駄が少ないと思った。私たちの生活もそうするべきと感じた。」「手厚いサポートなど村民が少ないからこそそのメリットもある。」「過疎地域における先進的な住宅の計画について学べた。」「地域に対する愛着が、村を大切にすることにおいてとても大切で、それが集落の名産品や伝統を守っていこう、受け継いでいこうという気持ちにつながっている。」などが挙げられた。



高齢者のお話と暮らし体験



復興モデル住宅の見学

d) 授業成果（担当教員からのコメント）

昔の暮らしの話を高齢者の方に聞きながら、暮らしの必需品であったわらじづくりを体験した。必要なものを自給自足する暮らしの力強さ、集落活動体験を通して村民の村への愛着に触れて、村の魅力を知ることができた。過疎高齢化が課題だと単一的にみるのではなく、村と向き合っこれからの地域づくりを考える機会となった。